

平成二十五年十一月十九日

映畫演劇等にて、世に土下座なる所作あり。地にひれ伏して只管懇願する相にして、目的達成のためには己が人格を棄つるの覺悟に、受け手も持て餘し、一先づ土下座を止めさせ對面の座を作り直し、改めて願ひを聞き直すが一連の場面なるを例とす。浮氣の發覺したる亭主、烈火のごとく怒れる女房に土下座して謝るなどは寧ろ失笑を誘ふも、實生活にては誇り高き人士のすべきものに非ず、又受くべきものにも非ずとするが一般の常識なり。

然るに最近テレビドラマなどにては「土下座」の場面表る、こと多く、大いに視聽を得るとかや。然れどもその場面たる、英雄的の主人公敵役を土下座せしめ傲然と謝罪を受くるに喝采を求むるもの多く、我が國從來の演劇に於ける懇願型とは明らかに一線を劃す。加之、或るテレビ番組に於て參加の女性視聽者百名中十七名が相手を土下座せしめたる經驗ありと云々。

これらの背後に近年我が國に於ける謝罪、報復の習俗に大いなる變化の兆、テレビにより加速せられあるを感ず。一つは謝罪記者會見にして、不祥事など發生の組織責任者並み居る報道陣に起立して頭を垂る、や忽ち起るシャッターの音聞かざる日とてなし。最近では謝罪叩頭の時間も長く、やがては土下座を求むる怒號に屈伏する姿放映せらる、にも至らむ。

またテレビの推理劇に於て、殺人犯人の割出し過程に種々工夫見らる、は當然にして視聽者を喜ばしむるも、眞犯人の動機は殆ど被害者への怨恨にして、その報復の心情をば暗に犯人への同情誘ふが如くの表現も散見す。また殺人の始終を事細かに描寫するもあり、小生もなるほど絞殺とは背後より紐にて喉を襲ふかと知るも恐し。

かやうに報復を是とし、その代償を求むるは、西洋を始めとして世界の慣習にして、中韓兩國による戦前戦中の我が國の所爲に對する謝罪要求もこの例に漏れず。謝罪により水に流す我が國人の意識とは大いに背馳するも、この世界的潮流に順ずべしとの勢ひ日に増す。さればこそ賠償を求むると同じく土下座を求むるもまた激しうなりたるらめ。但し問題は、賠償には情狀により自づから金額に相場あるに比し、土下座の要求は情狀に拘らずその人の人格を全否定するにあり、殘虐の譏り免れず。放置せば「許し」を尙ぶ我が文化を更に弱體化せしめむを危惧す。

幸ひと言ふべきか、土下座を強要せられたりとして、警察に被害届を出したる人ありて、強要の側逮捕せらる。何人も奴隸的拘束を受けざるを保障する憲法の規定を援用するまでもなく、所詮個人の尊嚴を抛棄せしむる土下座は、自らの意志により行なふとも、なほ演劇の舞臺に止むべきなり。